

天間川坂の手無観音

昭和六十年十一月五日号

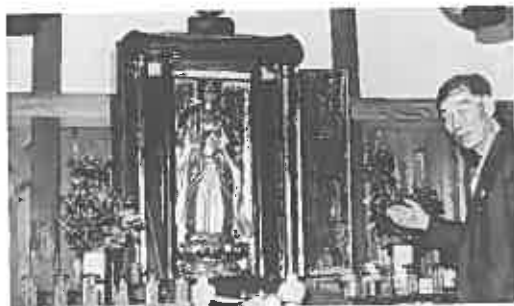
身延線富士根駅北側の天間川坂地区に、靈驗あらたかだという「手無観音」を祭つてある観音堂があります。今回は、この「手無観音」にまつわる話を天間川坂の遠藤光一さんうめ子さん夫婦に語ってもらいました。

流れてきた観音様

今から四百年ぐらい前、將軍足利義輝の時代のことです。小泉村に、喜六という魚取りの好きな人がありました。ある晩潤井川へ網をしかけ、翌朝、網を引き上げると、かかっていたのは魚ではなく十二寸ほどの木像の観音様でした。



川を流れている間にとれてしまったのか、



神々しい手無観音さん

手は二本ともありませんでしたが、神々しいほどの顔をしていました。喜八はともかく家へ運ぼうと、木像を懐たもとに入れて川坂まできました。そして、大きな松の根元の石に腰をか

け、木像を石の上において一休みしました。

しばらくして、木像に手をかけると、木像はみるみるうちに人間と同じ大きさになりました。びつくりした喜八が両手で持ち上げようとしても、観音様はビクともしません。喜八は、「この観音様がこの地に長く住んで、人々を救おうとのおぼしめしに違いない」と思い、大急ぎでほころをつくつて安置したそうです。

婦人病にご利益

遠藤さんは「この手無観音様は婦人病じよびょうにご利益りやくがあるといわれています。毎月十四日に地域の人でお経を上げます。八月十四日・十五日には、大祭が行われています。」と語ってくれました。